



日本語特例科目の現状と課題：
大阪府立大学留学生のケーススタディ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2011-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 雅代, 中山, 英治 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00010109

日本語特例科目の現状と課題

—大阪府立大学留学生のケーススタディー—

山口雅代・中山英治

1. はじめに

日本のさまざまな領域・分野で国際化が進む中で、大学で学ぶ留学生の受け入れ状況も 1983 年の中曽根内閣が提言したように「留学生 10 万人時代」を迎えようとしている。このような状況にもなると、日本語教育の多様化も進み、大学における日本語教育の現状も大きく変化している。

大学における理想的な日本語教育というものがあるとすれば、それは、多様化する学生のニーズに柔軟に対応できるようなシステムが必要となるだろう。現在の大阪府立大学では、留学生を積極的に受け入れる向きもあるが、場当たりの対応になっており、大学としての一貫した方針がなされていないために日本語の能力が十分でない学生への日本語教育がまったくなされていないという現状がある。

この論文では、現在の大阪府立大学での留学生に対する日本語教育の現状をあきらかにし、そこから今後の留学生に対する日本語教育のあり方を課題というかたちで示すことにする。この論文の具体的な構成は、次の通りである。

1. はじめに
2. 留学生の受け入れ状況と日本語特例科目の概要
3. 日本語特例科目の現状と問題点
4. 問題の原因と課題
5. おわりに

2. 留学生の受け入れ状況と日本語特例科目の概要

2-1. 留学生受験と入学者内訳

私費留学生が国公立の大学に入学する場合、2002 年以前は、日本語能力試験 1 級に合格し、私費外国人留学生統一試験¹の合計点数が必要であった。それがあって、受験できる大学が決まる。それが決まったら、今度は各大学が実施する独自の試験を受ける。

2002 年以降は、新たに設けられた日本留学試験²の受験が必要になったが、日本語能力試験

¹ 2001 年 12 月の実施をもって廃止。

² 試験科目は、数学・理科（物理・化学・生物）、総合科目及び数学。出題言語は、日本語と英語で出願時に選択できる。

1級を重視する大学もあり、まだ制度的に固まっていない。日本留学試験は、日本と海外の両方で日本語か英語で受験できる。これを利用すれば、海外からでも直接留学できる。

大学院受験の場合は、各学部委ねられており、上記の試験を受ける必要はない。大阪府立大学受験の詳細は表1の通りである。

【表1：2003年度大阪府立大学入試試験詳細 日：日本留学試験】

	学 部	日	独 自 試 験
大 学	工 学 部	要	小論文・口頭試問及び面接
	農 学 部	要	小論文・口頭試問及び面接
	経 済 学 部	要	数学・小論文・面接
	総 合 科 学 部	要	小論文(数理・情報科学科はないが数学がある、物質科学科・自然科学科は数学と選択)・口頭試問及び面接
	社会福祉学部	要	小論文・面接
大 学 院	工 学 研 究 科	不	語学(英語)・専門科目(日)・面接・口頭試問
	農 学 研 究 科	不	専門科目(英・日いずれも解答可)・口頭試問
	経 済 学 研 究 科	不	語学(英語)・専門科目(英・日いずれも解答可) 面接 ※博士後期は必修英語と選択外国語
	人間文化学研究所	不	語学(外国語)・面接
	理 学 系 研 究 科	不	面接・口頭試問 ※専攻により異なる試験実施
	社会福祉学研究所	不	面接・小論文 ※博士後期は語学・口頭試問

大阪府立大学に入学してくる留学生の数は、資料1(論文末参照)によると、1978年(昭和53年)には、学部生10名、院生10名、研究生3名の23名であったが、2003年(平成15年)には、学部生66名、院生112名、研究生・特別聴講生2名の200名になった。1982年(昭和57年)からは、学部生よりも、院生の数が増えて来ていることがわかる。特別聴講生というのは、大学間の交換留学生で、現在までに大阪府立大学と交換留学関係がある大学として、韓国の金鳥工科大学、オーストラリアのシドニー工科大学、スウェーデンのイエテボリ大学、タイのキングモンクット大学、フランスのセルジー・ポントワーズ大学がある。年度により、交換留学生が来たり、来なかったりとさまざまである。

今年度の留学生数は、学部ごとの内訳を見ると、表2の通りである。2003年度は、院生・研究生、特別聴講生を合わせると実に倍になる。(資料1(論文末参照))

【表2：平成15年度留学生数内訳 (学生課資料より作成)】

学部／学年	1	2	3	4	合 計	大学院	研究生	特別聴講生	総合計
工 学 部	0	3	7	2	12	30	2	1	45
農 学 部	1	2	0	0	3	40	10	1	54
経 済 学 部	0	1	10	7	18	10	4		32
総 合 科 学 部	4	6	5	13	28	29	3		60
社会福祉学部	1	0	2	2	5	3	1		9
合 計	6	12	24	24	66	112	20	2	200

2-2. 日本語特例科目の概要

大阪府立大学における日本語特例科目は、次のように2つに分けられる。

1) 日本語Ⅰ～Ⅲ：日本語Ⅰ「読解」・日本語Ⅱ「会話」・日本語Ⅲ「作文」

2) 日本語Ⅳ・日本事情：日本語Ⅳ「総合演習」・日本事情「発表」

1) は、日本語能力の中でも「読む・書く・聞く・話す」の四技能の習得を目的とした講座である。日本語Ⅰは、「読む」が中心で、学生が必要とするアカデミックな文章を効果的に読んで理解するための基礎的な能力を養成する授業である。日本語Ⅱは、「話す・聞く」が中心で、大学生活の中で必要となる高度なコミュニケーション能力の育成が主な目的となる。日本語Ⅲは、「書く」が中心となり、学生が必要とするレポート作成能力や論文の書き方などを学習する授業である。1) の全体的な到達目標は、大学での研究に必要なベースとなる高度な日本語能力の習得ということになるだろう。

2) は、1) の日本語能力をふまえた応用的、かつ総合的な授業である。日本語Ⅳは、日本語および日本社会一般に関する日本語の総合的な演習を行う。日本文化の紹介を行いながら、日本の文化と自国の文化との相違点を検討するのが目的である。日本事情では、日本に関するあらゆる社会現象を学生が主体的にテーマとして選び発表を行い、最終的にレポートを提出する。2) の全体的な到達目標は、基本的な日本語能力をベースにして、高度で総合的な言語活動を主体的な態度で行えるようにするということである。

【表3：日本語特例科目の概要のまとめ】

到達目標 授業科目名	段階内容	言語活動	具体的な到達目標
日本語Ⅰ～Ⅲ	基本的内容	技能・個別的	「読む」「話す」「聞く」 「書く」などの四技能
日本語Ⅳ・日本事情	応用的内容	総合的	情報処理能力 発表能力

3. 日本語特例科目の現状

日本語特例科目は、日本語Ⅰ～Ⅲと日本語Ⅳ・日本事情に担当者が分かれている。2003年度は、日本語Ⅰ～Ⅲを中山が、日本語Ⅳと日本事情を山口が担当している。下記では、この2つを分けてそれぞれの現状を挙げていく。3-1では、2002年度後期からの日本語Ⅳ・日本事情の問題点をAとし、2003年度前期の問題点をBとする。3-2では、2003年度前期の日本語Ⅰ～Ⅲの問題点をCとして述べる。

3-1. 日本語Ⅳ・日本事情問題点A、B

1) 問題点A

2002年後期の日本語Ⅳの大学側への受講登録者は6名と特別聴講生2名の8名であったが、実際に授業に参加しているのは、6名であった。内訳として、中国5名、オーストラリア1名であった。2名は、登録していたが、授業に一度も出て来ていない学生である。

日本事情は、大学受講登録者9名と特別聴講生3名の12名で、実際に授業に参加している学生も登録している学生である。内訳は、中国8名、韓国2名、オーストラリア2名である。2002年後期の講座には次のような問題点が見られた。

2002年後期には、特別聴講生という大学提携の交換留学生が3名受講している。内訳は下記の通りである。EとIはオーストラリアからの留学生であるが、二人とも中国系である。Iは10歳まで香港にいたこともあり、中国語を書くことも話すことも少しできる。しかしEはできない。下記の表3での2人の日本語のレベルは客観的なレベルをつけた。日本語Ⅳを受講したのは、Iだけであるが、日本事情は3名ともが、受講している。

彼ら以外のほとんどの学生が日本語能力試験1級を合格しているか、そのレベルの学生である。その中に混じってのEの日本語事情受講は困難を要した。Iは、まだそこそこ理解可能であり、日本語Ⅳも受講している。またモチベーションも非常に高い。Eは、ほとんど初級レベルである。自己紹介はカタコトの日本語と英語で行うレベルである。だが、特別聴講生として、大学側から受講表がでている学生である。教師側は、受講を拒否することもできるのだが、Eに話を聞くと、工学部の指導教官からとオーストラリアの指導教官からも、日本語を学んでくるように指示がでていうのである。果たしてそういった学生を一講師の一存で、受講拒否できるのであろうかという問題がある。

日本事情は、自分達の興味のある社会問題を調べてレポートにするというものであるため、Eは日本人の学生に手伝ってもらいレポートを完成はさせた。だが、日本語能力が伸びたかという疑問が残る。

【表4：特別聴講生背景】

	性別	国籍	日本語学習歴	学習場所	レベル
E	男	オーストラリア	2年	大学	初級
I	女	オーストラリア	3年	大学	中級
K	男	韓国	半年	自習	2級取得

2) 2003年前期問題点B

2003年前期に、日本語Ⅳを学生した学生は、中国7名と特別聴講生の韓国1名の8名である。日本事情は中国6名と特別聴講生の韓国1名の7名である。2003年前期の学生は、2002年後期に比べると少ない。これは、その年々で変わる入学留学生数と関係があるように思われる。実際2-1の表2を見ると、2003年度の学部入学の留学生は、6名であるが、2年生は12名、3年生は24名である。

2003年度の前期には、問題点Aで述べたような日本語力に問題のある特別聴講生がいないため、特別聴講生の問題点は見られなかった。

2003年度は、オリエンテーションには出席しても、自分のレベルに合わないと学生自身が受講をあきらめた学生がいる³。また、日本語学習を目的とする学生には、日本語Ⅰ～Ⅲの受講を勧めた。そこで、次に述べる問題点Cが起こった。

3-2. 2003年前期問題点C

日本語Ⅰ～Ⅲの授業では、学生のタイプによってさまざまな問題がある。ここでは、分析の観点として学生のタイプを次のようにわけて考えることにする。

(1) 学習経験の違い：「母国での日本語学習経験あり」「母国での日本語学習経験なし」

(2) 学習目的の違い：「院生の学習目的」「学部生の学習目的」

学生の日本語学習の経験は、大きくわけて2つのタイプがあった。1つは、母国で数年間の日本語学習の経験があるタイプである。大学や日本語学校での学習など機関の違いもある。もう一つは、日本の大学で短期集中型の準備学習があるタイプである。

学生の学習目的の違いは、大きくわけて2つのタイプがあった。1つは、院生の学習目的に関することであり、もう一つは、学部生の学習目的に関することである。

学生のタイプによる問題点のうち学習目的の違いは、前もって日本語授業のシラバスを説明して学生のニーズ分析をした後に授業に入るので、それほど大きな問題とはならない。しかし、学生の学習経験の違いは、大きな問題となった。母国での学習経験がある場合、少なくとも基本的な漢字の読み書きや発音・会話に問題はないが、日本での準備学習機関しか経験していない場合、基本的な漢字の読み書き、とくに初級の漢字についても未熟で、テキストの文字さえ読めないことがしばしばあった。会話の場合も基本的な意見を述べる力や話し合いに必要とされる単語もおぼつかない状況もあった。中には、皆の前で自分の意見を話すことに恐怖や不安を感じると告白した学生A（日本語学習期間6ヶ月の学習経験あり、ベネズエラ出身、女性）もいた。会話の授業では、発音のおぼつかない学生Y（日本語学習期間6ヶ月の学習経験あり、ミャンマー出身、男性）の話しかたに他の学生が笑うという場面もあった。

日本語Ⅰ～Ⅲにおける問題点としては、日本語能力の違う学生が同じ授業にまじっているという現状がいちばんの大きな問題になっているといえるのである。

³ 文部科学省の奨学金を受けて、大阪府立大学で研究している研究生の場合、日本語能力を身につけたいと思い、日本語Ⅳ・日本事情にやってきましたが、オリエンテーションを聞き、日本語能力向上を目差していたものと異なるため、講座受講を行わなかった。

【表5：日本語Ⅰ～Ⅲの問題点の整理】

学生 項目	学習目的の違い	日本語試験の有無	学習経験の有無	問題点
学部生	幅広い教養的な 日本語学習	あり	あり (母国で数年間)	なし
院生	研究課題に対する 日本語学習	なし	不十分 (短期的な学習)	あり

3-3. 問題点Cに対する対処法

日本語特例科目に対する大学側の姿勢は、学生の受け入れを担当の講師に任せているといっ
てよい。担当講師の判断で受け入れが可能であるということになると、学生のタイプによる個
別な対処法が必要になるわけである。もちろん、この段階で一定のレベルに達していない学生
の受講を認めなくてもよいのだが、果たして、目の前にいるモチベーションの高い学生の受
講を拒否できるだろうか。そこで、2003年度の授業では次のような対処法で個別の対応を行っ
た。

日本語Ⅰの「読解」では、一部の日本語の不十分な院生に対して、課題としてテキストの本
文読みと未知語の意味調べをさせることにした。その分、予習の必要な院生に関しては、授業
に対する負担が大きかったといえる。語彙の量から考えても、この段階の学生にしては時間の
かかる作業であっただろう。授業中には、他の学生に比べて机間巡視しているときの質問に対
応する時間が多かったが、大きな問題にはならなかった。

この授業の読解教材では、テキスト以外にも新聞の記事、ショートストーリー、各種雑誌の
記事などをとりあつかったが、いわゆる生教材を使用するときには、多くの未習語や読み方の
難しい語句もでてくるので、予習のできるように前もって教材を渡しておく手間が必要になっ
た。結果、学生間で質の違う読解教育になってしまった。こういった問題は、これからの課題
として考えなければならない。

日本語Ⅱの「会話」では、日本語が不十分な一部の院生に対して、テキスト本文の英語訳を
先に渡して予習させることにした。少なくとも授業の中で何の話題が話されているのかがわか
る環境をつくることに専念した。テキストの中には、グラフや図表が多く掲載されていたため、
比較的考えをまとめる時間はつくれていたのだが、もっとも大きな問題は、発言を求めるとき
であった。自分の考えや意見があつたとしても、基本的な話しかたや論理的な意見のしかたが
要求される場面では、院生が学部生の高度な話しかたについていけない。日本語Ⅱの受講者A
は、院生である自分が学部生の日本語についていけない状況にプライドが傷つけられるとい
うことを授業の合間に直接言ってくることもあつた。

しかし、授業も半ばになると、院生の日本語能力が学部生に認識されるようになってきた。
少しずつであったが、人前で話すことの面白さと好奇心がましてきて、最後の授業あたりにな
ると、課題に対する自発的、積極的な発言が増えてきた。

4. 問題の原因と課題

4-1. 問題の原因

上記の問題が起こった原因として、次の4点が考えられる。

1点目の大きな問題は、院生の受け入れシステムにある。院生の受け入れは、研究科ごとに行われており、大阪府立大学全体でサポートするような環境が整っていない。専門科目の相談であれば、指導教官が行っているだろう。生活面のサポートや相談は、学生課が行ってはいるだろう。日本語ができない留学生のストレスに関する対処法はどうしていったらよいのだろうか。自己努力として、受入側の大学は何もしなくてもよいのだろうか。それにも関わらず、112名の院生を受け入れているのである。

2点目の問題は、日本語の能力の十分でない院生が、大阪府立大学の日本語特例科目で日本語を勉強したいというモチベーションを持っていることである。実際に日本語があまりできずに大学院に入学したものの、大学内で日本語力が求められるのである。それは、院生間の情報交換でのコミュニケーションだったり、日本で生活する上での生活での一場面、一場面である。そういったことができないために、院生の中には、かなりのストレスを抱えている院生もいる。

3点目として、学部生と院生における日本語の扱い方にある。2002年度までの学部生は日本語能力試験1級に合格しているという条件で大学を受験する。これに対し院生は、日本語能力試験1級は必要としない。さらに、大阪府立大学受験に関しても農学部研究科のように、英語ができれば受け入れている例もある。一概にはいえないが、学部生の方が、日本語力があり、院生の方が、日本語力が低い場合がある。

最後に、資料1にあるように、大阪府立大学の留学生数において、学部生よりも院生が倍近く在籍をしている。それにも関わらず日本語特例科目は学部生用になっていることである。

4-2. 課題

留学生の生活面のサポートは、現状では学生課の4名が担当している。学部生よりも倍いる大学院生への日本語教育は、大阪府立大学ではいっさい行われておらず、大学外部のボランティア講座を紹介して対応している。大学院生の受け入れも各学部のみで判断されていて、大阪府立大学全体でどう受け入れていくか、考えられていない。そのために、入学した留学生の努力や現在ある日本語特例科目で対応するといった方法に委ねられているのが現状である。このような大阪府立大学における留学生の課題は下記のようにまとめられる。

【表5：大阪府立大学留学生の現状と課題】

大阪府立大学留学生の現状と課題		
	現 状	課 題
大 学	<ul style="list-style-type: none"> ・大学院生の受入は学部任せしている。 ・大学全体での受入システムがない。 	大学、学部、学生課の連携がなされていない。そのために、留学生がストレスを抱えていても、自己努力にまかされている。
学 部	<ul style="list-style-type: none"> ・院生の受入は各教授の采配による。 	
学 生 課	<ul style="list-style-type: none"> ・200名いる留学生を4名で見ている。 	
日 本 語 特 例 科 目	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語で受験してきた学部生を対象とする。 ・日本語能力が十分でない大学院生への日本語教育がない。 	日本語能力が十分でない大学院生の日本語学習のモチベーションが高く、日本語特例科目を受講したい希望がある。

5. おわりに

日本では少子化現象が起き、大学は生き残りを今後は余儀なくされる。大学が生き残っていくためには魅力的な大学作りが求められる。大阪府立大学で学ぶ留学生にとって、魅力的な大学にすることが、ひいては、日本人の学生に繋がっていくように思われる。日本人、留学生と共に学ぶ学生たちが、大阪府立大学で学ぶことの喜びを感じるような大学になってほしい。そのためには一刻も早く留学生のための環境作りを考えてほしいと願う。

また、2002年から日本留学試験が始った。この試験は、日本国内と海外とで、日本語か英語で試験を受けられる。海外でこの試験を受け、直接日本の大学に留学することができるようになった。今後この試験を受けて、直接大阪府立大学に入学してくる可能性もあるのである。そうなる前に、今後に向けての留学生日本語教育をどうするのは、早急に検討されるべき課題である。

【付記】

これを書くにあたり、学生課石岡さんに資料や助言をいただいた。この場をかりて感謝申し上げる。

【参考資料】

『私費外国人留学生のための大学入学案内 2004年度版』日本国際教育協会／編集・著
大学通信

『外国人留学生のための大学院入学案内 2003-2004』財団法人アジア学生文化協会編
同文館出版

「留学生交流関係施策の現状について」中央教育審議会大学分科会留学生部会（第1回）
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/007/030101d.htm)

【資料1】

外国人留学生の推移

(各年度 3月31日現在)

区分 年度	学部生	院 生	研究生	特別聴講生	計	対前年度比 (%)
S53	10	10	3		23	-
S54	13	9	6		28	21.7
S55	12	11	8	1	32	14.3
S56	13	12	10		35	9.4
S57	12	12	9		33	▲ 5.7
S58	14	22	16		52	57.6
S59	17	34	19		70	34.6
S60	16	38	17	1	72	2.9
S61	20	35	29		84	16.7
S62	23	47	41		111	32.1
S63	28	61	54	1	144	29.7
H01	40	72	80		192	33.3
H02	47	92	72		211	9.9
H03	50	114	52	1	217	2.8
H04	54	96	62	1	213	▲ 1.8
H05	63	96	76		235	10.3
H06	71	110	71		252	7.2
H07	76	123	70		269	6.7
H08	68	128	59	1	256	▲ 4.8
H09	65	133	55	3	256	0.0
H10	51	136	58	4	249	▲ 2.7
H11	46	154	59	3	262	5.2
H12	62	160	48	2	272	3.8
H13	70	157	33	4	264	▲ 2.9
H14	72	137	31	3	243	▲ 8.0
H15	66	112	20	2	200	

H15は5月1日現在

The problems of the present situation concerning the Courses “Japanese as a Foreign Language”

—A Case Study of Foreign Students at Osaka Prefecture University —

Masayo Yamaguchi, Eiji Nakayama

In 2003, Osaka Prefecture University accepted 200 foreign students – 66 bachelor students, 121 master students, 20 pre-master students and 2 exchange students. But the Japanese as a Foreign Language Courses is only for bachelor students who have taken the Examination for Japanese University Admission for International Students (EJU) in 2002 and those who achieved the Japanese Language Proficiency Level 1 before 2002. Master students, pre-master students and exchange students, who do not have necessary proficiency in Japanese, must study by themselves or take the Japanese as a Foreign Language Courses which they normally feel to be difficult, if they want to study Japanese.

EJU started in 2002. That means that foreign students can take the EJU in their home countries in English or in Japanese, after which they come directly to Osaka Prefecture University. Therefore many foreign students have little knowledge of Japanese and are unable to communicate to Japanese students and local people. These students want to study Japanese but they have no idea about how to do this. Under these circumstances it is necessary for the Osaka Prefecture University to consider introducing new methods of ensuring that foreign students can be integrated into the Japanese environment by promoting their Japanese language skill. Because of the large number of foreign students, it is necessary that the University should intensify Japanese Language teaching for these students by adjusting the level and increasing the number of course available.